

赤野井港建設に係る埋蔵文化財発掘調査概要報告書

赤野井湾遺跡

1986

滋賀県教育委員会

滋賀県文化財保護協会

序

滋賀県教育委員会では活力のある県民社会、生きがいのある生活を築くための一つとして、文化環境づくりにとりくんでいます。そうした中で文化財の保存と活用を図る施策のうち、開発に伴う埋蔵文化財の保護も重要な課題となっております。

先人の遺してくれた文化財は、現代を生きる我々のみならず子々孫々にいたる貴重な宝でもあります。このような大切な文化遺産を破壊することなく、後世に引き継いでいくためには、広く県民の方々の文化財に対する深いご理解とご協力を得なければなりません。

ここに赤野井港建設に伴う事前発掘調査の成果を取りまとめましたので、ご覧のうえ今後の埋蔵文化財保護のご理解に役立てていただければ幸いです。

最後に、発掘調査の円滑な実施にご理解とご協力を頂きました地元の方々並びに関係機関に対して厚く感謝の意を表します。

昭和61年3月

滋賀県教育委員会

教育長 南 光 雄

例　　言

1. 本書は赤野井港建設事業に伴う赤野井湾遺跡の発掘調査概要報告書で、昭和60年度に発掘調査を実施したものである。
2. 本調査は水資源開発公団琵琶湖開発事業建設部からの委託により、滋賀県教育委員会を調査主体とし、財団法人滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。
3. 本事業の事務局は以下のとおりである。

滋賀県教育委員会文化財保護課

課長	市原 浩
課長補佐	中正 輝彦
埋蔵文化財係長	林 博通
管理係主事	山本 徳樹

財団法人滋賀県文化財保護協会

理事長	南 光雄
事務局長	江波弥太郎
埋蔵文化財課長	近藤 滋
調査一係	兼康 保明
同技師	大沼 芳幸
総務課長	山下 弘
主事	松本 賢弘
主事	立入 裕子

4. 本書の執筆、編集は調査担当者大沼芳幸を中心として調査員桂牧の協力を得て行なった。
5. 本書で使用した方位は磁北方位に基づき高さについては東京湾の平均海面としている。
6. 出土遺物や写真・図面については滋賀県教育委員会で保管している。
7. 今回の調査では以下の諸氏の御協力を賜った。

京都芸術短期大学浅香美津子・深見千香子・竹内淳子・仏教大学島田七生・小野睦美・小林由紀・京都産業大学中島暁子・同志社大学内田一成・関西大学野毛康広・池坊短期大学小萩美佳子。

記して御礼申し上げます。

目 次

序

例 言

第一 章 位置と環境..... 2

第二 章 調査経過..... 2

第三 章 調 査

1. 層 位..... 3

2. 遺 物..... 7

第四 章 ま と め..... 10

図版目次

図版1. 周辺地形

図版2.

(上) 第12トレンチ土層

(下) 第7トレンチ土層

図版3.

(上) 第13トレンチ全景(東より)

(下) 第15トレンチ、砂層検出状況(東より)

図版4. 遺物

(上) 繩文式土器(おもて)

(下) 同上(うら)

図版5. 遺物

(上) 繩文式土器(おもて)

(下) 同上(うら)

図版6. 遺物

(上) 繩文式土器

(下) 弥生式土器、須恵器

図版7. 遺物

(上) 土師器

(下) 土師器

図版8. 遺物

(上) 土師器

(下) 土師器・黒色土器・その他

図版9. 地形および調査位置

図版10. トレンチ配置図

- 図版11. 土層柱状図
- 図版12. 出土遺物実測図
- 図版13. 出土遺物実測図
- 図版14. 出土遺物実測図

挿 図 目 次

- 第1図 周辺遺跡分布図
- 第2図 調査地遠景
- 第3図 第11～12トレンチ土層実測図
- 第4図 第13トレンチ土層実測図



第1図 周辺遺跡分布図

第一章 位置と環境

赤野井湾遺跡は、南を鳥丸崎に、北を木ノ浜に囲まれた赤野井湾中に存在する。赤野井湾は、太古より幾度となくその流路を変えつつ流れ続けた野洲川によって形成された沖積平野の延長上にあり、現在も、旧野洲川の痕跡とみられる境川をはじめとし、天神川、矢島川、法竜川等の中小河川が流入している。

湖岸は宏大な蘿原が広がり、発達したクリークの岸に生える柳とともに独特の景観を作り出しており、陸地からの人間の侵入を永い間阻んでいた。波比較的穏やかで、早春より水温の上る湾内は種々の魚達の産卵の場所として、また稚魚のゆりかごとしての役割を果し続けて来た。また必然的に好漁場としての役割をも持ち、湾内の隨所に大小の釣が施設され、季節ごとの湖の幸を漁獲していた。²¹ 60年度に行なわれた他の湾内調査においても釣の痕跡とみられる竹杭が検出されており、古くから釣漁が盛んに行なわれていたことがうかがわれる。あたかも対岸に対するかに見えたという木ノ浜の大釣も近くに設置されていた。しかし、現在、琵琶湖総合開発の進行とともにこれらの景観は一変しつつある。

湾内の湖底地形は単調で、水深1~2mのほぼ平坦地を形成している。湖底は、場所により堆積量に差異はあるが、いずれもヘドロ状の泥土に覆われており、ダブ貝、イシ貝、タニシ等の泥地性の貝類が棲息している。しかし、遺物を包含する層位から砂地性のシジミの殻が多量に出土することを見ると赤野井湾の生成過程においては、現在とは異なる様相、景観が形作られていたのであろう。

第二章 調査経過

赤野井湾遺跡は近年の水中分布調査によって確認された赤野井湾中に存在する湖底遺跡である。今回の調査は、赤野井湾および農業用水取水口建設に先立つもので、現地調査は昭和60年5月7日から同年7月20日まで実施した。調査対象地は湾内を埋めたてた後矢板で仕切った工区内に設定した。調査は当初遺構、遺物の有無を確認する



第2図 調査地遠景

ための試堀調査として開始したが、調査対象地の第11トレンチにおいて遺物包含層が確認されたため、発掘調査に変更しトレンチを拡張し、遺物包含層の範囲を確認するとともに、その性格を解明することに主眼を移した。調査対象地は後にも触れるが、ヘドロ状の泥土が厚く堆積し、かつ湧水がきわめて激しく、トレンチ壁を保持することが不可能な状況であり、調査は困難をきわめた。なお7月2日～7月11日までの間は琵琶湖の異状湧水のため調査区が水没し、調査を中止せざるを得ない状態となった。

第三章 調査

1. 層位

今回は調査対象地内に16ヶ所のトレンチを設定し、調査を実施した。以下各トレン

チの土層堆積状況を中心に報告する。

第1トレンチ

農業用水取水口に設定した4.8m×5.7mのトレンチで、調査時には工事用の盛土がなされていた。

第1層は盛土層である。第2層は暗茶褐色のヘドロ状の泥土である。第3層は暗黒褐色の粘質土でビニール等が含まれている。第4層は暗灰褐色の粘質土層である。第5層は暗灰褐色の砂層であり湧水が激しい。第6層は暗茶褐色の粘質土で腐植質を多量に含んでいる。第7層は青灰色の粘土層である。

第2トレンチ

農業用水取水口に設定した5.7m×9mのトレンチである。

第1層は暗茶褐色のヘドロ状の泥土層である。第2層は灰褐色のきめの細かな粘土層である。第3層は明灰色の粘土層で、腐植質を含んでいる。第4層は灰褐色の砂層で、根毛状の腐植質を含んでいる。第5層は灰褐色の粘土層で腐植質を多量に含んでいる。第6層は茶褐色の粘質土層である。第7層は青灰色の粘土層である。

第3トレンチ

調査対象地の北側を東西に仕切る矢板内に設定した5m×15mのトレンチである。

第1層は暗茶褐色のヘドロ状の泥土層である。第2層はきめの細かな灰褐色の粘土層である。第3層は灰褐色の砂層で貝殻を含んでいる。第4層は白灰色の砂層で腐植質をわずかに含んでいる。第5層は青灰色の粘土層である。湧水が激しいため以下の調査は不可能であった。なお、トレンチ西側においては、第3層の下に明茶褐色粘質土のわずかな落ち込みが見られた。

第4トレンチ

第3トレンチと同じ矢板内の西端に設定した5m×4mのトレンチで、土層の堆積順序は第3トレンチとはほぼ同様であるが、第3トレンチ第2層にあたると思われる粘土層のうち上部が暗灰色を呈しているため2分した。

また、5層以下は湧水のため確認できなかった。

第1トレンチから第4トレンチの対応する層位をつなげて見ると全体として西に向って傾斜している様子がうかがわれる。

第5トレンチ

調査対象地の南側を東西に仕切る矢板内に設定したトレンチであるが、きわめて激しい湧水のため $5\text{m} \times 12\text{m}$ のトレンチの調査に4日間も日数を要してしまった。

第1層は暗茶褐色のヘドロ状の泥土層である。第2層は灰褐色のきめの細かな粘土層である。第3層はやや粗い暗灰色の粘土層である。第4層は灰褐色のきわめて細い粒子の砂層である。第5層は灰褐色の $1\sim 3\text{mm}$ 程度の粗い粒子の砂層である。以下湧水のため調査不可能であった。

第6トレンチ

対象地の東側を南北に仕切る矢板に添って設定した $6\text{m} \times 6\text{m}$ のトレンチである。

第1層は暗茶褐色の泥土層である。第2層は灰褐色の粘土層である。第3層は暗褐色の砂層で貝殻を少量含んでいる。第4層は明茶褐色の粘土層である。第5層は青灰色の粘土層である。第5層は下位に行くに従い砂質を帯びてくる。

第7トレンチ

第6トレンチの北側に設定した $5.5\text{m} \times 8\text{m}$ のトレンチである。このトレンチで観察される層位は第6トレンチのものとほぼ同一である。

第8トレンチ

第7トレンチの北側に設定した $5.5\text{m} \times 8.5\text{m}$ のトレンチである。このトレンチで観察される層位も第6・第7トレンチで観察されたものと大差ない。

第6~8トレンチを観ると、第1~3層はほぼ平行堆積であるが、それ以下は北に傾斜して堆積している状況がうかがわれる。

第9トレンチ

対象地の西側に設定した $5\text{m} \times 7\text{m}$ のトレンチである。

第1層は暗茶褐色のヘドロ状の泥土層である。第2層は灰褐色の粘土層である。第3層は暗紫灰褐色の粘土層である。第4層は青灰色の粘土層である。

第10トレンチ

第9トレンチの北側に設定したトレンチである。

第1層は暗茶褐色のヘドロ状の泥土層である。以下激しい湧水のためトレンチが崩れ、安全な調査が確保できないと判断されたため調査を中止した。バックホーにより取り上げた土から遺物は検出されなかった。

第11トレント

対象地のほぼ中央に設定した5m×10mのトレントである。

第1層は暗茶褐色のヘドロ状の泥土層である。第2層は灰褐色の粘土層である。第3層は暗褐色の砂質土層であるがトレント西側でなくなる。第4層は暗紫灰褐色の粘土層である。第5層は明灰色の粘土層である。第6層は灰褐色の砂層で、第4層および第5層を切り込む形で堆積している。第7層は暗茶褐色の粘土層である。第8層はやや粘質を帯びた明灰色の細砂層である。

第12トレント

第11トレントにおいて検出された第6層の砂層が溝状のものになるのか、単なる落ち込みの堆積なのかを明らかにするために、第11トレントに接続して東側に7m×21mのトレントを設定して調査した。

第1層および第2層は第11トレントと同じである。第3層も同質の層位であったが、この中から布留併行期と考えられる土師器片や土錐片が検出された。第4層の砂層はその深さを増し、溝状に堆積しているようであった。遺物は第3層からのみ検出され、トレントのほぼ中央から集中して出土している。

第13トレント

第12トレントの南側に設定した11m×20mのトレントである。

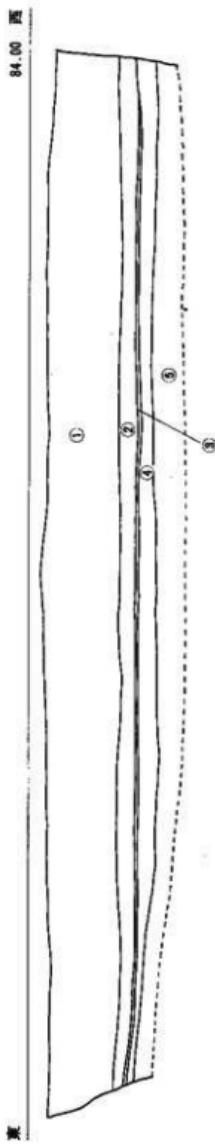
第1～3層までは第12トレントと変わらないが、第4層は暗紫灰褐色の粘土層。第5層は青灰褐色の粘土層で、第12トレントで検出された溝状の砂層は検出されなかった。遺物は第3層からの出土で、トレントの北側からのみ出土している。遺物の年代にはばらつきが見られ、縄文時代後期の土器と6世紀代の須恵器が同時に出土している。

第14トレント

第12トレントの北側に設定した6.5m×5mのトレントである。

基本的な層位は第12トレントと変わらないが第6層の砂層は検出されなかった。遺物は第3層からのみ検出され、トレント中央の南側に集中して出土している。出土遺物の年代は、ばらつきがはげしく、縄文時代後期のものから平安時代の土師皿までが混じって出土している。

第4図 第13トレンチ土層実測図



第3図 第11~12トレンチ土層実測図



第15トレンチ

第12トレンチで検出した灰色砂層の溝状の堆積の広がりを確認するために第10トレンチの北側に設定した5m×5mのトレンチである。このトレンチも第10トレンチと同様湧水が激しく正確な土層を確認することは困難な状態であった。

第1層は暗茶褐色のヘドロ状の泥土層である。第2層は灰色系の粘土層であるが、この層位が分層出来るか否かは定かでない。第3層は灰色の砂層である。この層から遺物は検出されていない。

第16トレンチ

第12トレンチで検出された溝状の砂の堆積を確認するために、第12トレンチと第14トレンチの間に設定した。調査の結果第12トレンチと同レベルで砂層の連がりを検出することができた。第1層は暗茶褐色のヘドロ状の泥土である。第2層は明灰色の粘土層である。

2. 遺 物

縄文式土器

本遺跡から出土した縄文式土器はいずれも小片かつ磨滅しているためその全容はつかみ難いがおおよそ次のような特徴を持つものに分類できる。

- A) 口縁が内側に屈曲し、その上面に1条の凹線と刻目風の文様を施すもので、口縁の下位に2条の凹線がめぐるもの①・②。不規則な凹線文が数条めぐるもの③がある。
- B) 2~数条の凹線文および凹線により区画された文様を持つもので、幅の広い凹線がめぐるもの④~⑯、比較的幅の狭い凹線文を持つもの⑰~⑲がある。前者にはスリ消し縄文の遺存するものが認められる。
- C) 黒褐色の色調を持ち、数条の櫛描風の沈線が一部に入るものの⑳~㉑。
- D) 無文のもの㉒~㉔。
- E) その他底部。

これらの土器は一部を除いていずれも縄文時代後期の特色を持つもので、当遺跡出土の縄文式土器はほぼこの時代の所産と考えられる。

弥生式土器

- ⑩⑪は口縁部に凹線文をめぐらす壺の破片で、弥生時代中期のものであろう。

(102)は外面に叩き調整の痕をとどめる甕の体部破片で、弥生時代後期もしくは古墳時代初めの所産と思われる。

須恵器

(201)は返りを持つ环身の破片で、底部および返りの部分が欠損している。底部外面の約 $\frac{1}{3}$ に回転ヘラケズリ調整を施してある。(202)は环蓋で天井部が欠損している。口縁内面に弱い段がめぐる。(203)は环身もしくは环蓋の破片であるが、ここでは环蓋として図化した。天井部外面の約 $\frac{1}{3}$ に回転ヘラケズリ調整を施してある。(204)も环身もしくは环蓋の破片であるがここでは环蓋として図化した。残存部の全体に回転ヘラケズリ調整が施してある。(205)も环身もしくは环蓋の破片であるがここでは环身として図化した。残存部外面の全体に回転ヘラケズリ調整が施してある。(206)はやや大型の高环の脚部破片である。据部はゆるやかに屈出し、外面に1条の突帯をめぐらし、端部は丸みを持つ。(207)も高环の脚部である。据部を肥厚させ、端部は丸みを持つ。(208)は甕もしくは壺の体部の破片である。外面に格子叩目を持つ。(209)も甕もしくは壺の破片である。外面に平行叩き、内面に同心円状の叩きを持つ。

当遺跡出土の須恵器は破片が多いため年代等は明示出来難い面もあるが、(201)や(202)、(203)のようにヘラケズリ調整が全体の $\frac{1}{3}$ 程度であることや、(201)の立ち上りが短いことが予想されること、(202)の端部内面に弱い段を持つことから6世紀後半代の特徴を持つものもあるが、(206)の外面に弱い段を持つことなどから5世紀末～6世紀前半にかけての年代が考えられるなどかなりのばらつきがみられる。

土師器

甕 (301)は体部より「く」の字状に屈曲する口縁を持つ甕で、口端内面を肥厚させる。(302)も(301)と同じタイプのものであるが、口端内面の肥厚が(301)に比して少ない。(303)も「く」の字状に屈曲する口縁を持つ甕であるが、口端は単純に終る。(304)も外反しながら「く」の字状に曲る口縁を持つもので、端部は単純に終る。(305)は大きく外反する口縁を持つもので、口端は丸みを持って終る。(306)は小型の甕の底部と考えられる。底面外部をやや凹ましてある。

壺 (307)は大きく外方に広がる口縁を持ち、端部を上方につまみ上げている。外面はヨコナデによる調整が施されている。(308)も大きく外方に広がる口縁を持つもので、端部をやや上方につまみ出し気味におさめる。

(309)～(314)はいずれも甕か壺と思われる土器の体部の破片で、外面にハケによる調整を施してある。

高坏 (315)の坏部はやや浅く、底部と口縁の端に弱い段が認められる。口縁端部はきわめて薄くおさめる。調整は剥落のため不明である。

(316)の口縁は一坦大きく外方に広がった後さらに外方に屈曲する。端部は断面方形状におさめる。調整は不明である。(317)は坏部底面より直線的に外上方にのびる口縁をもつ。端部は薄くおさめる。調整は不明である。(318)は大きく外方にのびる口縁を持つ高坏の一部であろう。(319)は「ハ」の字状に広がる裾部を持つ。端部はわずかに外方に屈曲し、丸くおさめる。(320)は大きく外方に屈曲した後さらに下方にわずかに屈曲する柱部および裾部を持ち端部は丸くおさめる。(321)は柱部から大きく外方に広がる裾部を持つタイプであろう。(322)は内面に稜が1条めぐることから(320)と同じようなタイプのものになると思われる。(323)～(325)は器型は明示し難いが、いずれも外方に広がる裾部の一部であろう。(323)の端部はやや劣り気味に、(324)、(325)の端部は丸く、それぞれおさめる。(326)は、坏部と脚柱部の接合部である。いずれの土器も磨滅が激しく調整は不明である。

その他、(327)は口縁を「S」字状に屈曲される土師小皿である。きわめて薄い作りである。

当遺跡より出土した土師器はいずれも小片で器型を知り得るものはきわめて少なく、また全体に磨滅、剥離が激しいことも観察を困難にしている。その中でも(301)、(302)は口縁の内面が肥厚していることから布留式の特徴を持っている。また(303)、(304)も口縁の形態よりその前後の年代が考えられよう。(307)、(308)の壺も口縁が外反し、端部をつまみ上げる形態を持つことより(301)、(302)と近い年代が考えられる。高坏で形態のわかるもののうち(315)は口縁が短くさらに境に段がわずかに認められる等弥生末期の特色を持つものの、内面に段が認められないこと等からそれよりは新しい年代が考えられよう。(316)は大きく広がる口縁を持つことが予想されることから、古墳時代の前期～中期の年代が考えられる。(317)は坏部が小型化していること等より古墳時代中頃～後期にかけてのものと思われる。裾部の破片のうち(320)、(322)等は屈曲部を持つことから(317)と同じタイプのものと思われる。(327)の小皿は口縁の形態より9世紀頃のものと考えられる。以上見てきたように当遺跡出土の土師器の年代には相当のば

らつきが認められるが、布留併行期の土器の出土量が最も多いようである。

黒色土器

(401)はいわゆる近江型の黒色土器の塊である。内面には弧状の暗文が認められる。外面には指押えの跡が明瞭に残る。これらのことより、この黒色土器は12世紀代のものと思われる。なおこの外面には稲穀の圧痕が残る。芒の長い原生種に近い稻のようである。

その他

土錘、(402)は球形のものである。(403)は円筒形のものであるが、内面の中央付近に稜がめぐることからこの土錘の製法が単に棒に粘土を巻きつけ焼成したものではなく、手ツクネ風の手法により作られたものと思われる。(404)は単純な内面を持つ円筒形の土錘である。

土錘の用法には種々の網漁が考えられるがこれだけの資料では各々の土錘の用法を考えるには余りにも資料不足であるといわざるを得ないため、今回は考察を保留する。

(405)・(406)はサヌカイトの破片である。

第四章 まとめ

今回の調査により、縄文時代後期から平安時代までの遺物を出土する包含層と、自然流路が1条検出された。

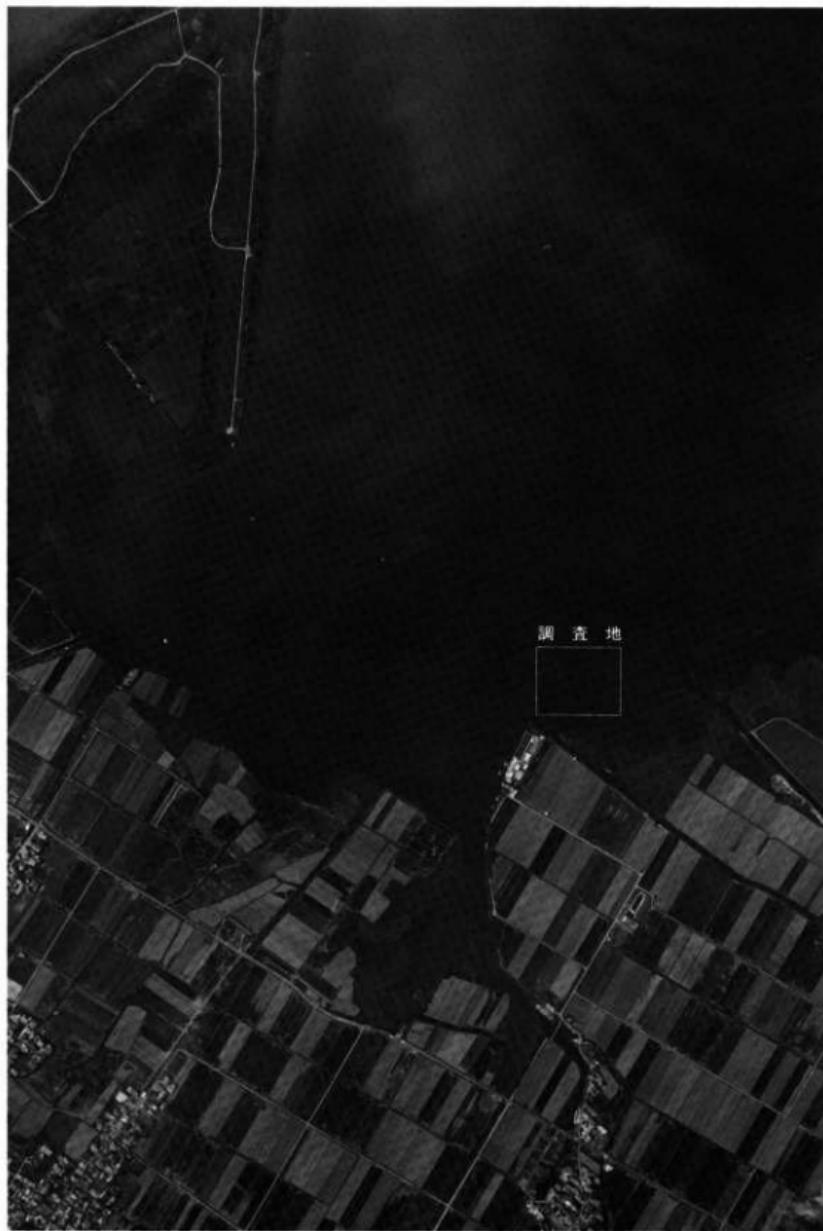
遺物は調査対象地のうちほぼ中央部に集中しているが、この遺物を包含する土層と同質の土層は、調査対象地の東側を中心として広く認められる。また出土した遺物はいずれも激しく磨滅しているものが多くかつ年代に大きなばらつきがみられることなどから、上流から流されて来た遺物が何らかの作用により集中的に二次堆積したものと思われる。

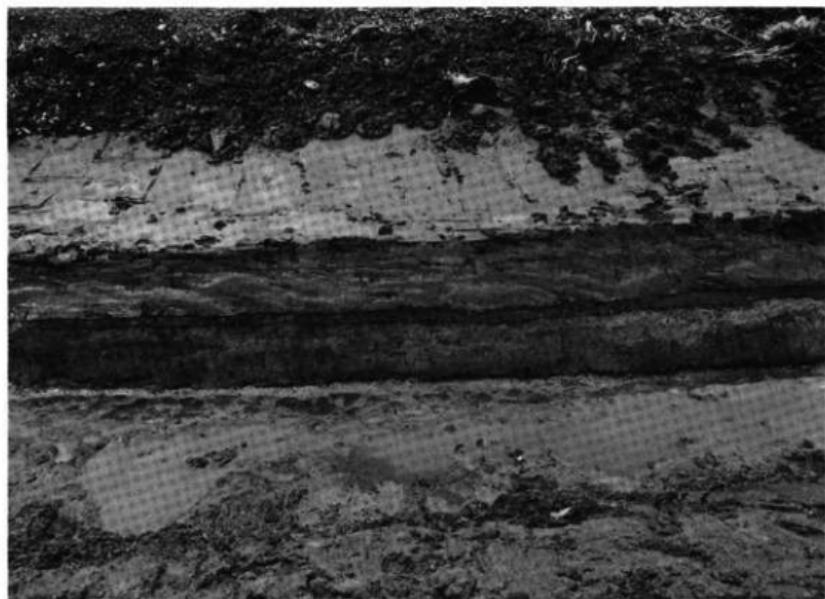
この包含層の下層から検出された自然流路は規模は一部でしか確認出来なかつたが、およそ幅8m～16m深さ0.6m以上を測り調査地の南東から北西方向に向って流れている。この埋土の中から遺物は検出されなかつた。

以上のことから現在の赤野井湾が生成される過程においてある時期（少なくとも平

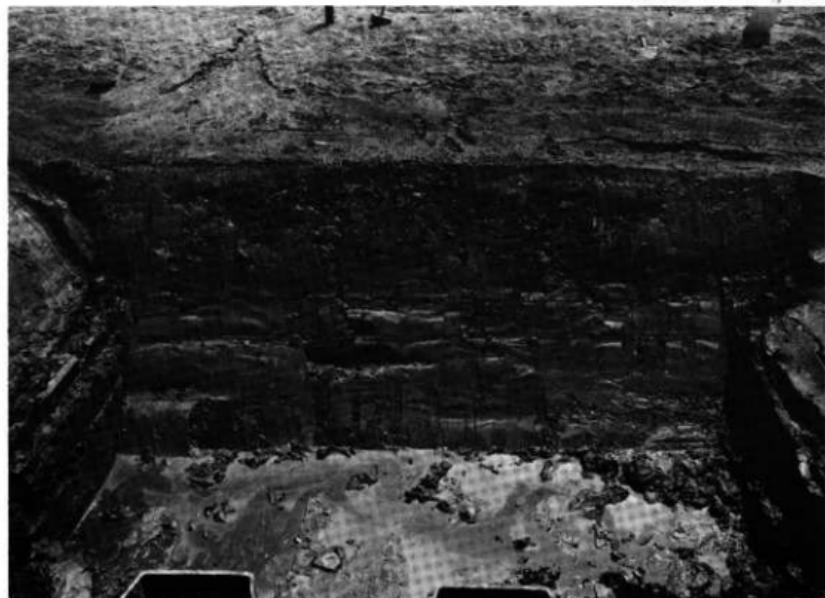
安時代以前）に陸化していた時代があったことがあり、その後上流の遺跡から流出した遺物を堆積させる程活発な堆積作用を受けた時期を経、淀み状の流れのない静かな湖水をたたえる時期に至ったことがうかがわれる。

当遺跡の位置付けについては今後の調査により湾内の遺物の分布および陸化の範囲、さらには琵琶湖東岸の遺跡の分布等が明らかにされるのを待ちさらに検討を加える必要がある。





第12トレンチ 土層



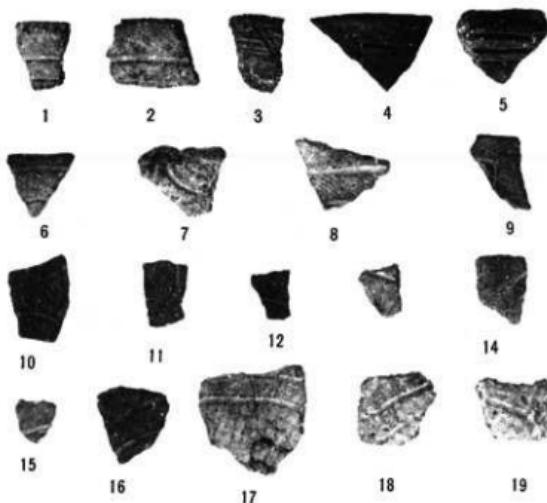
第7トレンチ 土層



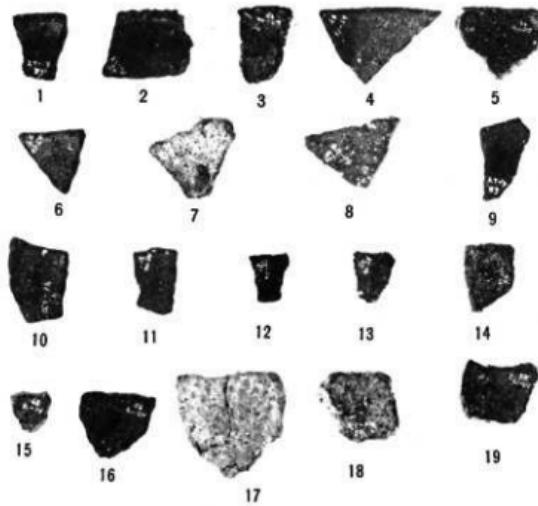
第13トレンチ 全景（東より）



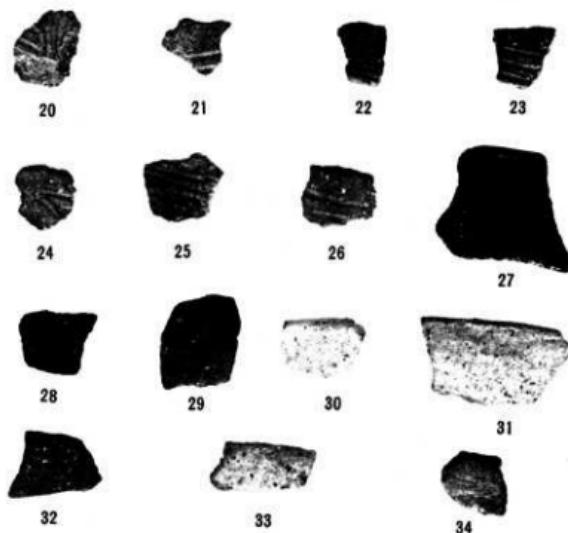
第15トレンチ 砂層検出状況（東より）



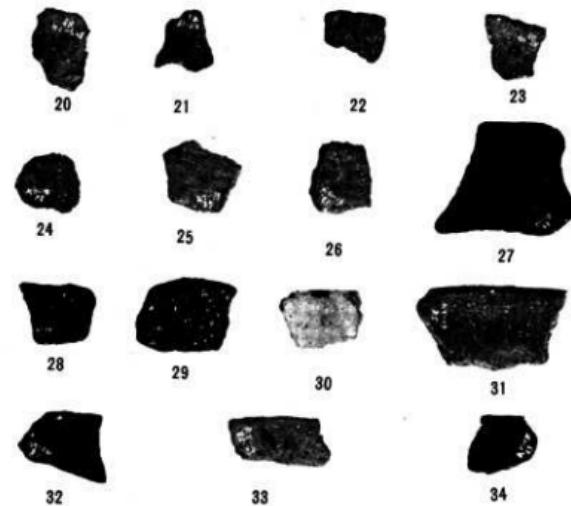
縄文式土器（おもて）



同 上（う ら）



縄文式土器（おもて）



同 上（う ら）



35



36



37



38



39



40



41



42



43

繩文式土器



101



102



201



202



203



204



205



206



207

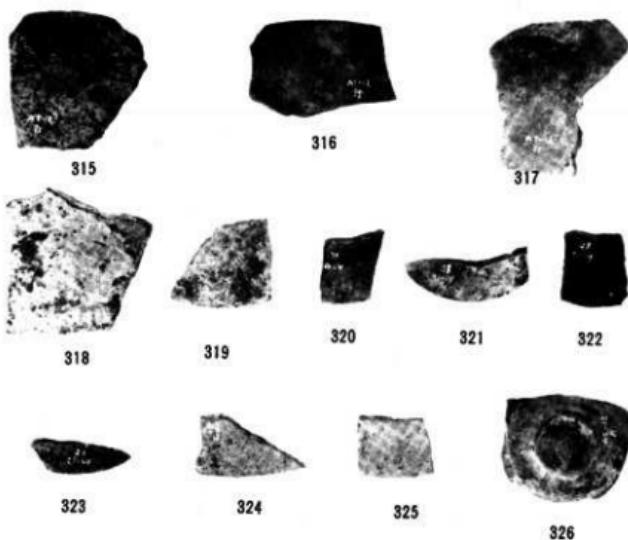


208

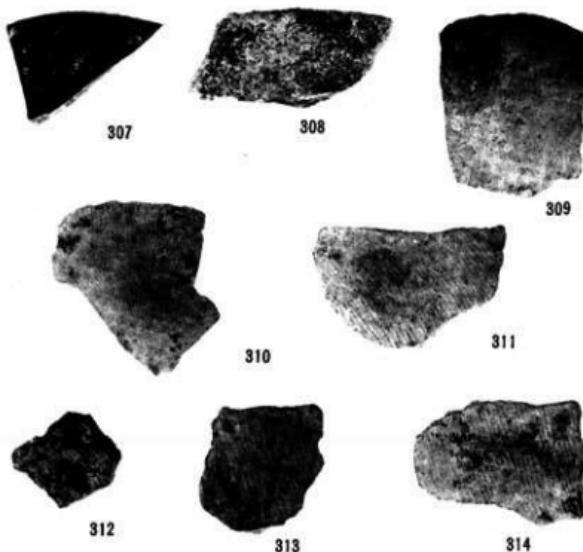


209

弥生式土器・須恵器



土師器



土師器



301

302

303

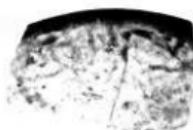


304

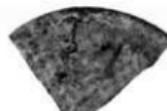
305

306

土師器



401



327



404



403



402

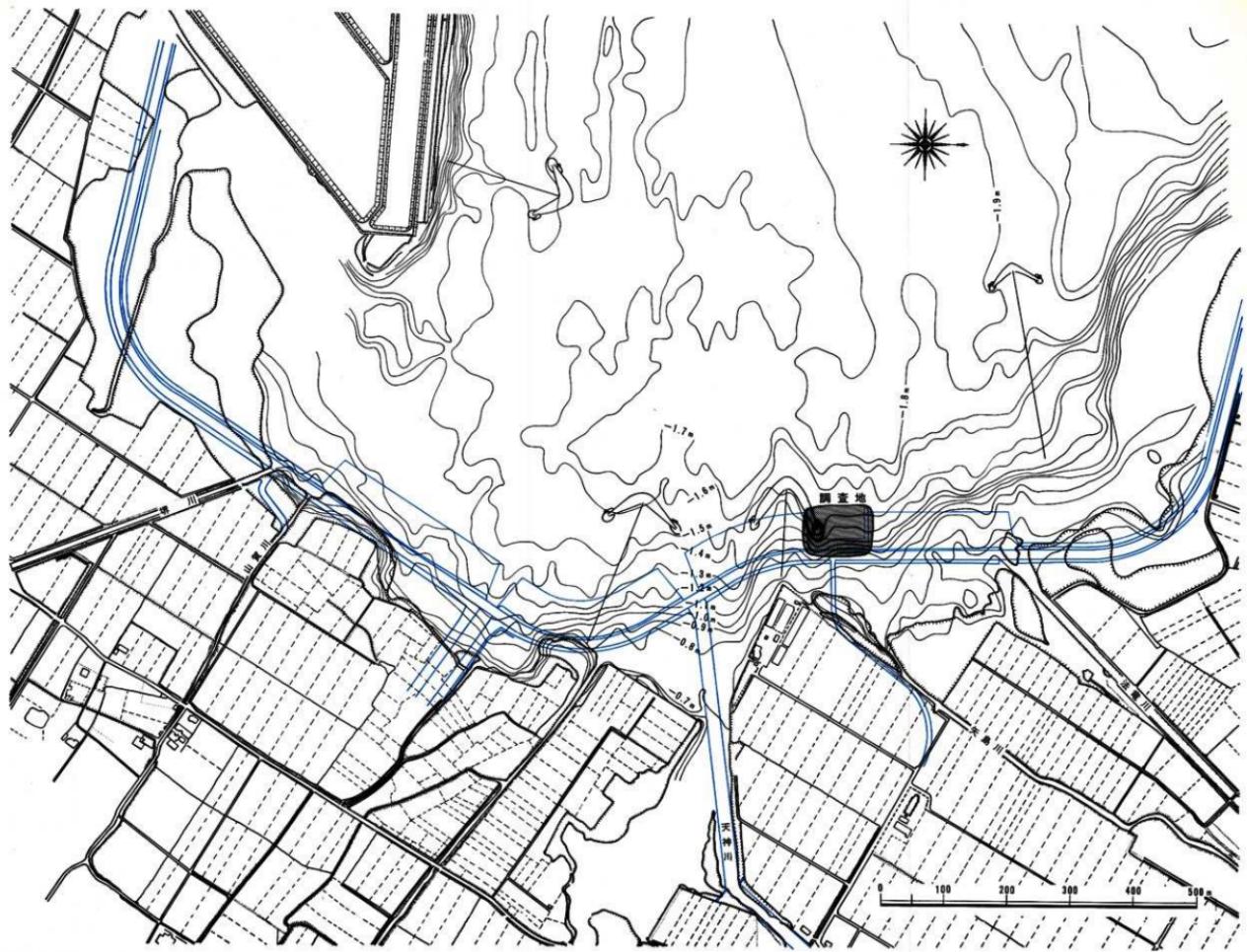
406



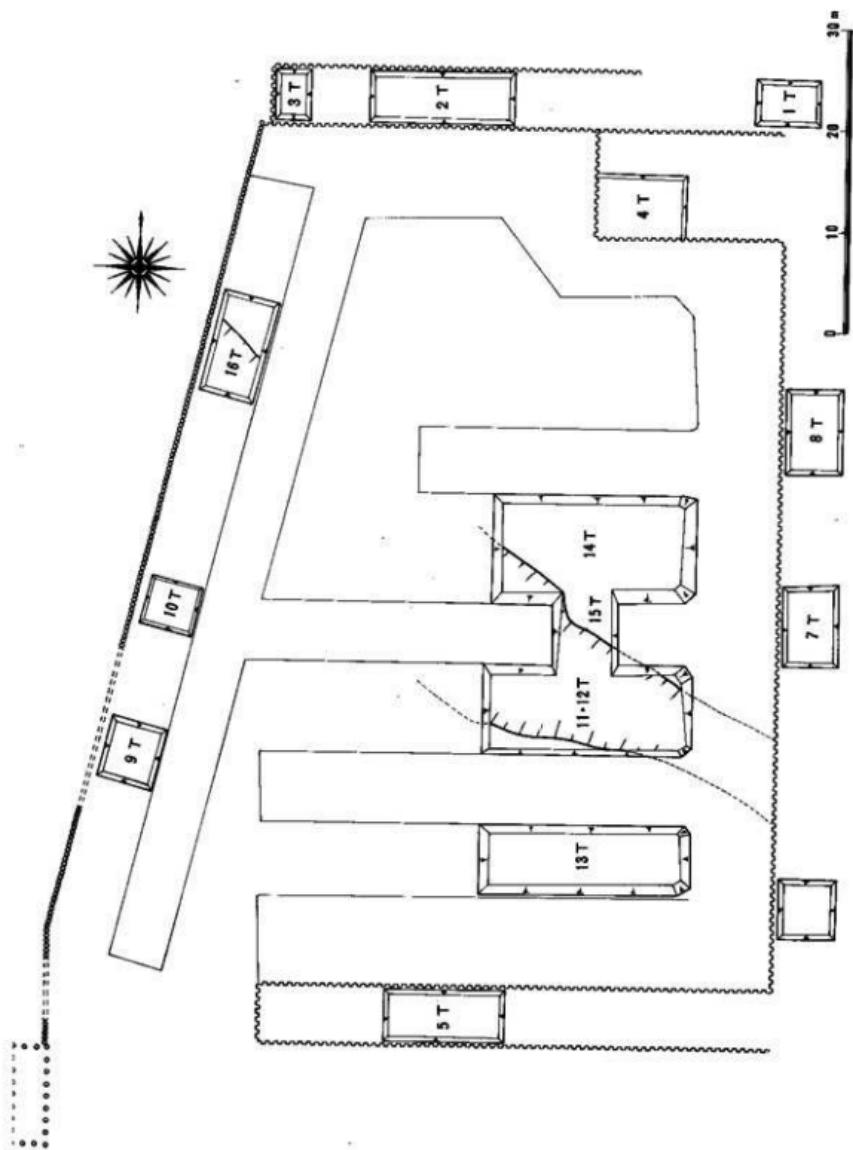
405

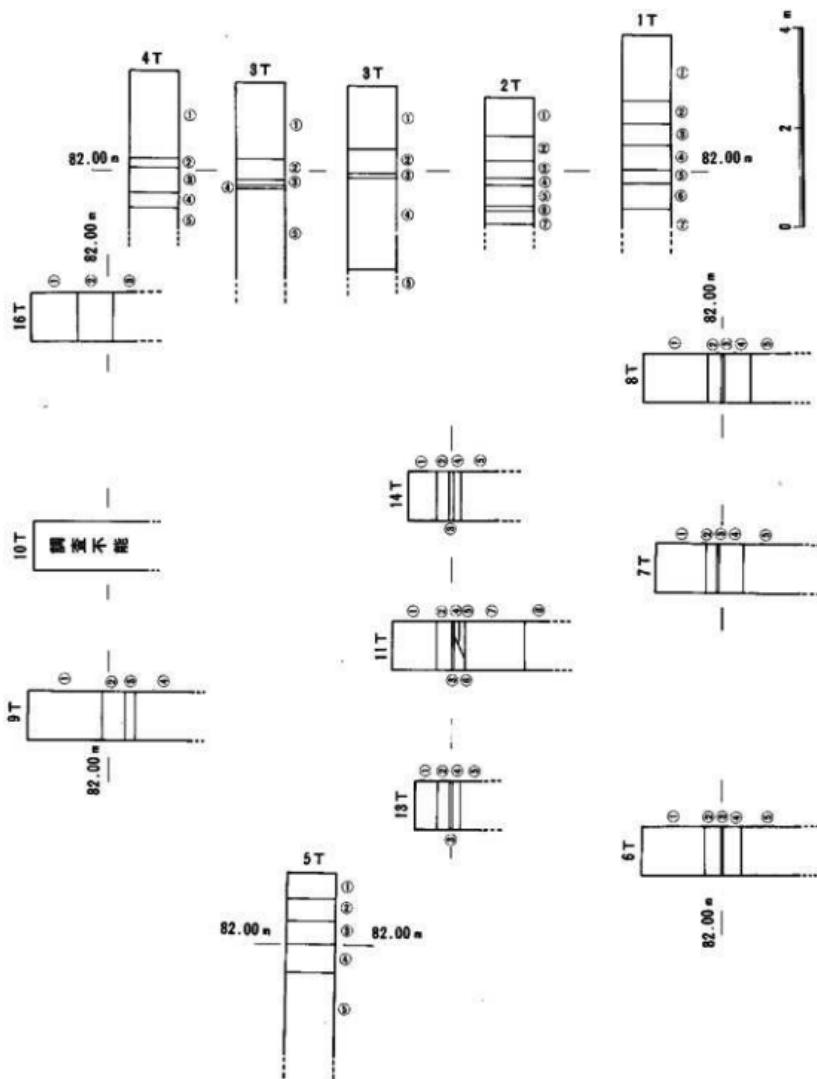
黑色土器・土師器・その他

図版九 地形および調査位置

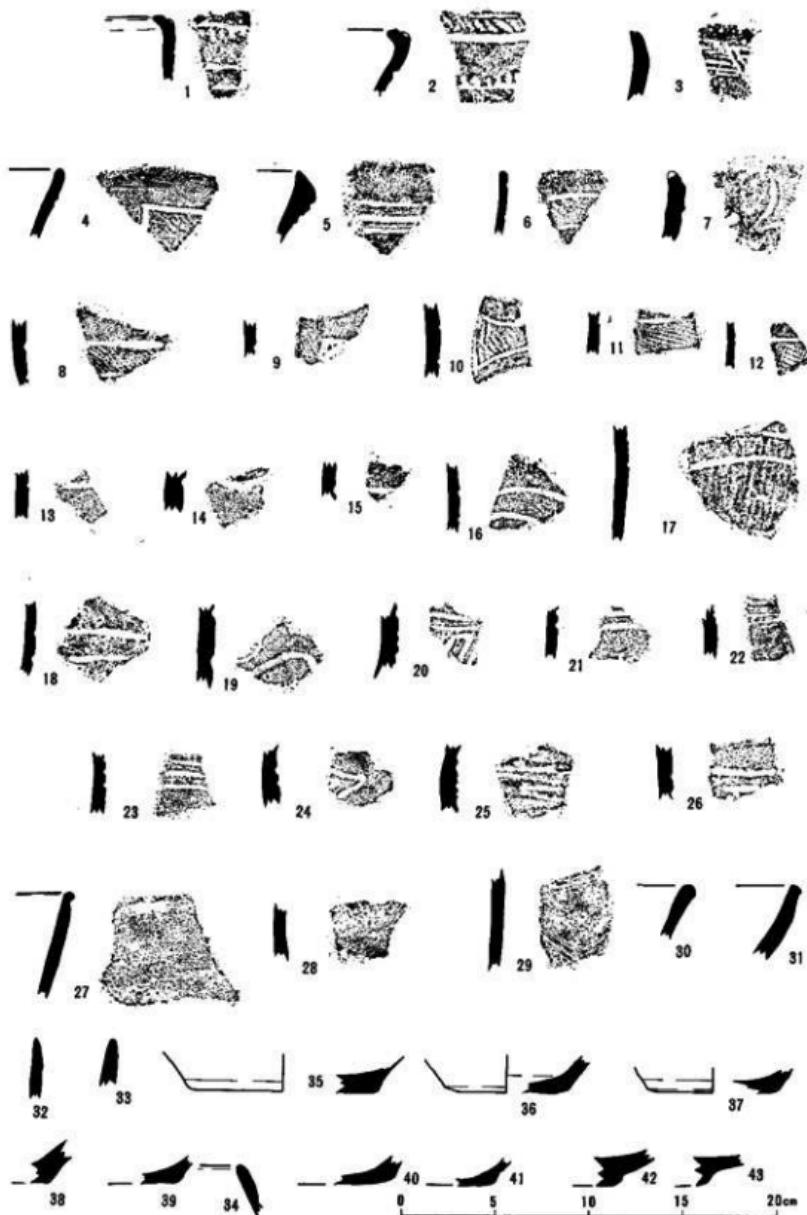


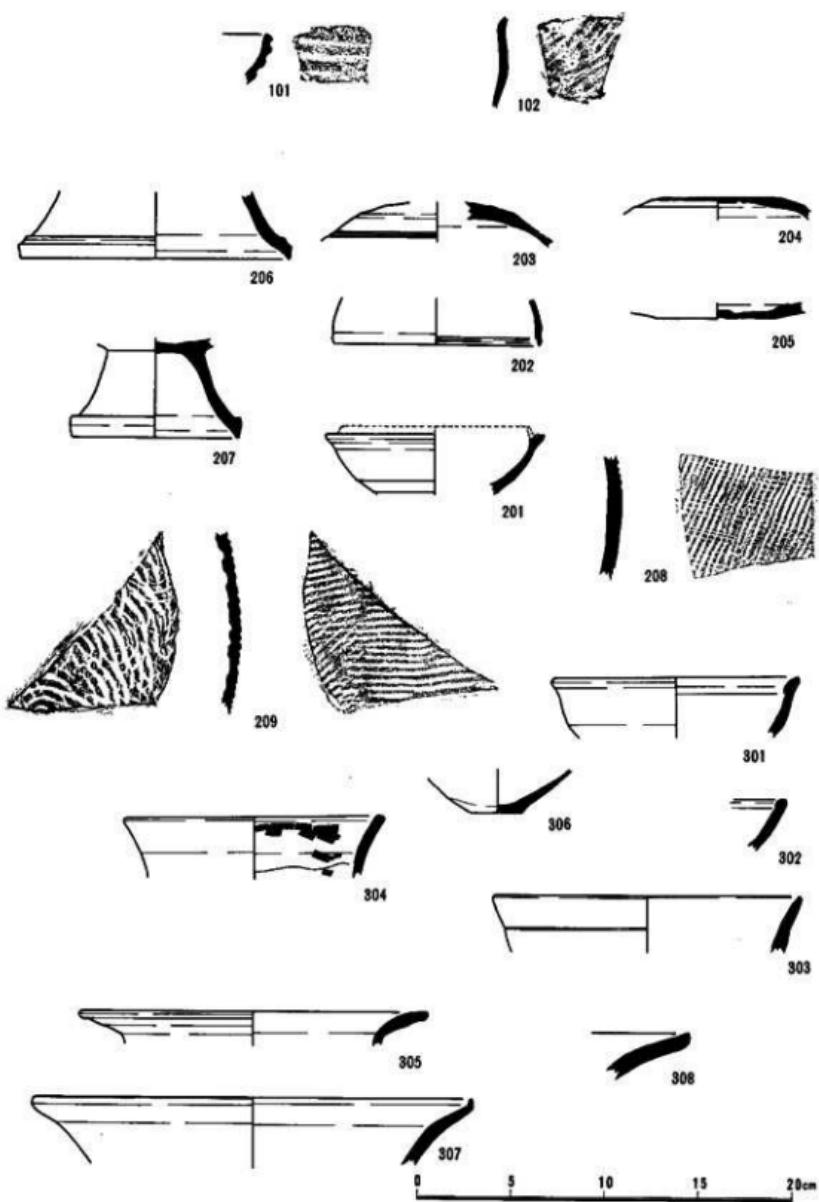
十 トレンチ配置図



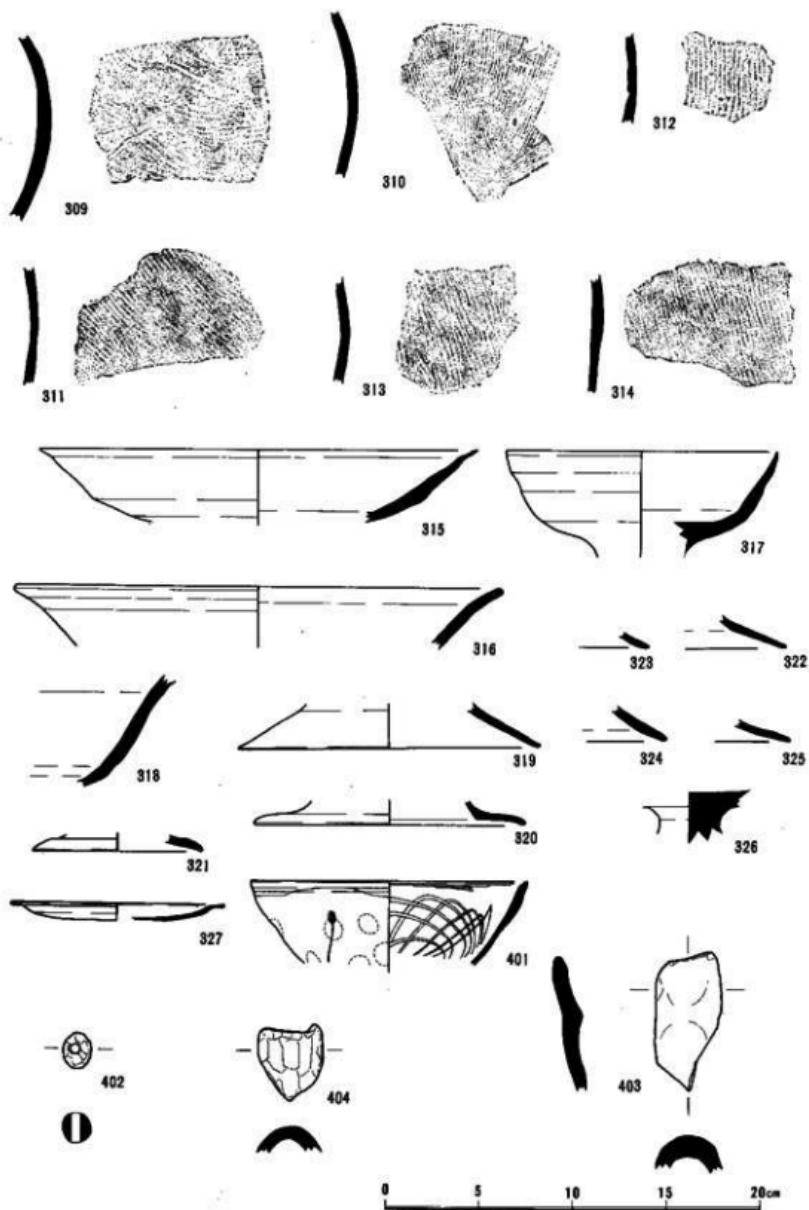


図版十二 出土遺物実測図





図版十四 出土遺物実測図



刊行年月 昭和 61 年 3 月

刊行物名 赤野井港建設に係る埋蔵文化財発掘調査概要報告書

赤野井湾

編集・発行 滋賀県教育委員会文化部文化財保護課

大津市京町四丁目 1 - 1

電話 0775-24-1121 内線 2536

輔 滋賀県文化財保護協会

大津市瀬田南大萱町 1732 - 2

電話 0775-48-9781

印刷・製本 明文舎印刷商事株式会社

長浜市朝日町 11 - 27

電話 0749-63-1441 ㈹